

## 後輩達に自分の夢を語り、後輩達の夢・志作りを手伝う

中学校時代の彼は、自身の劣等感を克服し、親の期待に応えようとしてがむしゃらに勉強し、地元で一番の進学高に見事に合格しました。

ところが、高校に入学して暫くすると、彼はその高校と自分のイメージしていた高校との違いを感じ始めました。そんな折、練習でミスしたら組全体に連帯責任を課す、その高校の体育祭の名物「高校生体操」で、体操が苦手な彼がミスをしたことをきっかけに、その高校への失望感に変わり、1年の9月には不登校になり、翌年1月に中退してしまいました。彼の両親は、息子の地元で一番の進学高校中退をなかなか受け入れられませんでした。

それから半年ほど、彼は静岡市内の通信制高校に籍を置きましたが、勉強する気になれず、殆ど通えませんでした。一種の燃えつき症候群の状態でした。

その年の6月、彼の親が静岡県教育フォーラムのホームページで私のことを知り、相談に来ました。聴けば、彼は予定より1か月早く生まれ、保育器で育ちました。社宅住まいの中、母親は彼が3歳頃まで産後鬱を患いました。これも思春期後の彼の人間関係の築きずらさや学校生活の失望感に関わった可能性を、私は考えました。

私はまずは彼の心理分析から、彼に向く進路、職業を模索する一方で、彼自身に、インターネットや本などで今の彼の興味、感心事を調べさせました。また彼には、スタッフによる認知行動療法も取り入れたメンタルトレーニングを受けてもらいました。

彼は元々大学には行きたかったことから、まずは予備校に入学して勉強を始め、半年後の12月の高卒認定試験を受け、8科目すべてに合格しました。その後、彼は自分の進路をスタッフと話す中で、話が当時彼の一番の関心事だったユーチューバーと動画編集に移っていきました。しかし、メンタルトレーニングを受ける中で、彼が取り掛かっていた動画編集はなかなか進まなく、進路の方向が情報処理分野に向かいました。そして、そのスタッフのアドバイスもあり、東洋大学の情報連携学部を始めとした大学の経営情報学部進学を志望するようになり、受験科目も決め、大学進学に向けて本格的な受験勉強を開始しました。

彼のような場合、まずは親の期待から自分の目標を見い出して明確化させる。そのことで親や周りからの承認欲求を満たす。そして体験活動や交流合宿などを通じて、コミュニケーション能力を養い、自分で考え、判断し、行動するように指導します。

一方、親には過干渉にならず、子を信じて見守るようアドバイスする。アドラー心理学でいうところの「課題の分離」、子どもの進路であるから、進路を決定するのは、その子自身であって、親はそれを精神的、資金的に援助する、ということです。

そして、単なる入学試験合格を目的とするのではなく、その先の世界に貢献する人材を育てるという教育理念を掲げる、彼が所属する予備校でもそうだが、自分の志が大変大事です。

思春期後、自我に目覚めた子ども達は、周りの女の子、男の子は意識し始め、親を始め周りの大人や先輩たちやマスコミ、今ではインターネットで、様々な生き方を知り、自分の将来を夢見るようになります。中学校進学や高校進学を前にした大事な時期、子ども達は自分の将来を考えるようになります。

そんな時に、親が受験する中学校名や高校名に拘ると、子どもはその親の意向を忖度し、それにけなげに応えようとします。大事な将来設計、志設計をする前に、目先の受験に拘り、それに必死になります。

そんな時期には、お父さん、お母さん、本人と膝を突き合わせて、話し合いを持つこともいいと思います。そこで、みんなで夢を語ってみたいかがでしょうか。お父さん、お母さんの若い頃抱いた夢を、本人のかすかに芽生えた夢についてです。もし本人が分からないと言ったら、大事なことからお父さん、お母さんの話した夢も一つの参考、自分で調べて自分で考えようと諭して下さい。子ども自身でそうした志設計をすることです。別に、膝を突き合わせなくても、プロジェクトXを見ながらでも、日本のトップリーダーの話をインターネットで聴きながらでもいいです、その時期そんな話をして下さい。そして、中学、高校は、その志、夢への通過点にすぎないという意識を持たせることが大事だと思います。

彼曰く、「一時失望感を感じていた自分が、AO入試で大学に合格。今はスタッフの方の勧めで、所属していた予備校で「担任助手」として働いています。そこで、後輩達に自分の夢を語り、後輩達の夢・志作りのお手伝いをして、また、フォーラムの交流合宿にリーダーとして参加し、不登校の子供たちと一緒に活動し、本当に楽しい毎日です。」

(2022年9月3日放送 FM島田「ひげぐま先生の相談室」から)